

「火のある暮らし」の行方

暖炉と囲炉裏の日英米実態調査より

大阪ガス エネルギー・文化研究所 所長 真名子 敦司 *Written by Asushi Manago*

「火のある暮らし」の実態把握に向けて

エネルギー事情の変化や器具の発達にもなうて、我が国では、「火のある暮らし」の象徴であった囲炉裏やかまどや火鉢が廃れつつある一方で、欧米ではセントラルヒーティングが普及した今も、伝統的な暖房器具である暖炉が健在といわれている。その違いは一体何に起因しているのだろうか。

「火のある暮らし」の実態把握を目的に、日英米各国の暖炉と我が国の囲炉裏の現状について調査した。今回は、その結果の概要を報告したい。まず、主な調査条件を下表に示す。

	日本	イギリス・アメリカ
調査時期	2004年8月～9月	2004年9月
調査対象者	北海道を除く全国で、「暖炉」または「囲炉裏」を所有している20歳以上の既婚者	イギリス全土およびアメリカ全土で、「暖炉」を所有している20歳以上の既婚者
調査方法	インターネットによる二段階調査（調査会社リサーチモニターに対して、スクリーニング調査で所有者抽出後、本調査を実施）	インターネットによる一段階調査（調査会社リサーチモニターに対して、スクリーニング調査と本調査の同時実施）
暖炉のスクリーニング条件	・本物の火を使うもの ・自宅または別荘に自分で設置したもの	・本物の火を使うもの ・冬季に月1回以上使用するもの
回答者数	・スクリーニング調査：27,422人 ・本調査：暖炉所有者80人、囲炉裏所有者40人	・スクリーニング調査：イギリス382人、アメリカ525人 ・本調査：暖炉の所有者各国100人

国によって異なる暖炉のタイプ、燃料は薪かガス

暖炉は設置方法によって埋め込み型と据置き型、燃焼室の扉の有無によって開放型と密閉型に分類される。我が国では据置き・密閉型、イギリスでは埋め込み・開放型、アメリカでは埋め込み・密閉型が主流である。

暖炉の燃料は、我が国とアメリカでは約七割が薪で、二割前後がガスである。イギリスではガスが主流で五割を超え、残りは薪と石炭に二分される。イギリスでは、都市部において石炭や薪の使用が禁止された後も、「火のある暮らし」の伝統を守るために燃料がガスへ転換され、ガス焚きの暖炉が広く普及しているのである。

日英米ともに、薪の選択理由は、「本物の炎を楽しみたいから」が五割前後を占める。また、イギリスで主流のガスの主な選択理由も、やはり「本物の炎を楽しみたいから」であり、日米におけるガスの選択理由は「手間をかけずに、本物の炎を楽しみたいから」という。

住宅事情の変化とともに進化する囲炉裏のタイプと燃料

囲炉裏のタイプも燃料も、住宅事情や生活様式の変化とともに進化しつつあるようだ。現在は伝統的な切炉式に、座卓式や掘りこたつ式を

加えた三タイプが主流である。熱源は、約六割が木炭で、三割が電気である。木炭の選択理由は、「入手しやすく、本物の炎を楽しみたいから」で、電気の選択理由は、「安全で手間がかからないから」といふ。

囲炉裏は、現代風にデザインや燃料を変えつつ、一部では、「火のある暮らし」を支える大事な道具として根強く生き残っているようだ。

マイナーな存在ながら愛好者を惹き付ける

日本の暖炉と囲炉裏

スクリーニング調査によると、我が国における暖房専用機（エアコンを除く）のベストスリーは、電気カーベット、こたつ、石油ファンヒーターで、いずれも普及率が五割を超える。一方、伝統的な直火を使った暖房用に用いられる火鉢と囲炉裏は、普及率が各々二・六パーセントと〇・五パーセント、暖炉は普及率が一・三パーセントで、いずれもやはり数字の上ではマイナーな存在である。

ところが、現在使われている暖炉も囲炉裏も、その七割以上が、新築時またはリフォーム時に設置されていることが分かった。我が国に馴染みが薄い暖炉については当然だが、廃れつつあるといわれている囲炉裏でさえ、最近設置されたものの方が圧倒的に多いのである。今のところ普及率は低いものの、暖炉も囲炉裏も愛好者の熱い支持を得ているようだ。

セントラルヒーティングとの併用が一般的な英米の暖炉

英米両国では、暖房機の中でセントラルヒーティングの普及率が圧倒的に高く、イギリスで九割、アメリカでは六割を占める。それに次ぐのが暖炉で、イギリスで四割、アメリカで二割強の普及率である。アメリカにおける両者の普及率はいずれも全土の平均値であり、暖房不要地域を除いた普及率はもっと高くなるはずである。なお、英米の暖炉所有家庭におけるセントラルヒーティングの普及率も、各々九割、七割と高い。

両国では、暖炉とセントラルヒーティングの併用は一般的であり、セントラルヒーティングが普及した今も、「火のある暮らし」の伝統が頑なに守られている。

日本の暖炉所有者は寒冷地に住む裕福な中高年層、
囲炉裏所有者は全国の広い層

スクリーニング調査結果から、我が国における暖炉の年代別、居住地域別、世帯年収別の普及率をみると、暖炉の所有者は、東北・甲信越・北陸の寒冷地に住む比較的裕福な中高年層に多い。ちなみに、暖炉が設置されている住居は戸建持家が九割を超え、別荘が四割弱も占めている。

一方、囲炉裏は、暖炉に比べると年代間、居住地域間、世帯年収間の普及率の差が小さく、所有者は年代や地域を越えて広い層に及んでいる。

英米の暖炉所有者は平均的な中流家庭

イギリスにおける暖炉の普及率は若年層で高く、二〇～三〇歳代の普及率が平均を上回る。また、全国的に普及しており、一部の地域では普及率が五割を超える。所有者のうち中所得層が四割を占めて最も多く、暖炉が設置されている住居は、全て普段生活している自宅である。

アメリカでは暖炉普及率の年代間の差は小さく、暖房が不要な一部の地域を除き全国的に普及している。イギリス同様、中所得層の所有者が四割を占め、暖炉が設置されている住居は、全て普段生活している自宅である。

英米ともに、暖炉の所有者像は平均的な中流家庭といえそうだ。

あこがれて設置された日本の暖炉と囲炉裏、
古い暖炉が健在な英米

我が国では、暖炉と囲炉裏の所有者の約五割が、設置したきっかけとして、「以前から欲しいと思っていた」を挙げており、強い「あこがれ」を抱いて購入した人が多い。

一方、英米両国では、設置したきっかけとして、「購入した住宅に設置されていた」が五割前後を占め、古い暖炉が今も健在のようだ。

■ 使用満足度が高い暖炉、暖房能力が不足気味の囲炉裏 ■

暖炉の使用満足度は極めて高く、三力国とも九割近くの人が満足している。中でもイギリスでは、「非常に満足」と答えた人が六割弱も占めている。

囲炉裏についても七割以上の人が満足しているものの、「非常に満足」の人は約一割に止まっている。暖房能力不足を指摘する声が多く、これが「非常に満足」の評価を低く抑えている主な要因のようだ。

■ 機能満足度が低い日本の暖炉 ■

暖炉と囲炉裏の暖房能力、本体価格、設置費用、維持管理費用、燃料調達や維持管理・使用時の手間など機能面に関する八つの質問をした。

暖炉については、英米では、「設置費用」と「維持管理費用」に満足している人が六〜七割、他の項目に満足している人は八割前後と、満足度は全体的に非常に高い。我が国では、「暖房能力」と「使用時の手間」に満足している人の割合は英米並みに高いものの、その他については四〜六割と総じて低い。特に、「非常に満足」の人の割合が低かった。

一方、囲炉裏については、「暖房能力」と「設置費用」に満足している人が約四割と少ないものの、他の項目に満足している人は七割前後で、暖炉に比べて全体的に満足度が高い。

我が国では、暖炉の使用満足度は高いにもかかわらず機能満足度が低いという調査結果である。これは、我が国ではまだ、暖炉本体の供給・設置、燃料供給、維持管理サービスなどの市場が未成熟なため、気軽に使用できる状況に至っていないからではないだろうか。



精神的充足感を与える暖炉、
コミュニケーションを促進する囲炉裏

さらに、暖炉と囲炉裏の使用による心理的效果について

て一七項目の質問をした。

暖炉の心理的效果を総合的に問う質問「火のある生活の精神的充足感」については、三力国とも八割以上の人が実感している。「癒し」「くつろぎ」「心の落ちつき」「居心地のよさ」「暖かさの心地よさ」などの精神的鎮静効果や快適性を評価する人も、三力国とも八割を超えている。一方、「会話の弾み」「人と親しくなれる」「家族の絆が深まる」といったコミュニケーションを促進する効果を評価する人は四〜六割とやや低目である。

囲炉裏の心理的效果を評価する人の割合も総じて高く、全般的には暖炉とほぼ同レベルである。項目別にみると、囲炉裏は暖炉に比べて、「インテリア性のよさ」「暖かさの心地よさ」の評価は低いものの、「会話が弾む」などのコミュニケーション促進効果の評価は高い。

暖炉や囲炉裏の火は部屋を暖めるだけでなく、心を温め、動かす効果があるのは確かなようで、これが暖炉や囲炉裏の大きな存在価値になっているといえそうだ。

■ 期待される「火のある暮らし」の復活 ■

暖炉を使用している人のうち我が国では九割以上、英米では八割以上の人が、「継続して使用したい」と答えている。囲炉裏使用者の九割近い人も、強い継続使用の意向を表明している。

一方、我が国のスクリーニング調査対象者のうち一〜二年の間に自宅の新築またはリフォームを予定している三三一人に、暖炉または囲炉裏の購入意向を尋ねたところ、二割強が暖炉、一割が囲炉裏に関心があるという。この割合は暖炉と囲炉裏の現在の普及率の約二〇倍に匹敵する。「火のある暮らし」にこだわりや関心を持つ人は少なくないようだ。

最近の『国民生活に関する世論調査』によると、六割の人が今後の生活に「心の豊かさやゆとり」を求めているという。今回の調査結果から、「火のある暮らし」の復活がそれを叶える有効な手段だと結論づけるのは筆者の僻見だろうか。

CEL